

美術家の視点



深沢 襟

—舞台美術のアイデアはどこから？

最初に演出の宮城さんが、この作品は「平面」を意識し、俳優の動きも紙芝居のようにページをめくることにポーズを変えていくようなものにした、とわざわざ言っていたので、日常の中で平面性を意識できるものはないかと考えに思いつきました。

折り紙は一枚の紙ですが、折り方ひとつで違うものに変わっていく。この物語も、物の見方ひとつで見えてくる景色が変わっていくので、内容とも合っているんじゃないかなと感じて。舞台は一枚の折り紙がまさに今折られようとしている、折って何かを作り出そうとしている様子を表しました。壁面は、影絵のスクリーンとしても使われます。

—白で統一された世界観も印象的です。

この物語は「日常がそもそもの奇跡であり、そう感じて生きていく」というお話。だから、お客さんが目にするものはとにかくきれいである

一枚の折り紙が 純白の舞台に

べきと感じていて。*折り紙もいろんな色を折って試してみたいが、やっぱり白。清潔感がある、黒とのコントラストもきれいですし、お客さんも自分の想像の世界を広げていきやすいのではと思います。

—舞台を見るポイント？

「きれいである」ということに心を動かしてもらえたらうれしいです。普段見ている風景の中にもあるけれど、この舞台では特にきれいな状態で見やすく提示できるように意識しました。こちらはどう感じてほしいというより、皆さんに、自分が何を面白がる人なのか、何をきれいに楽しく感じる人なのか、意識しながら見てもらえたらと思っています。



2017年初演の様子(撮影三浦翔二)

オリヴィエ・ピイと「詩」

西尾祥子 『グリム童話「少女と悪魔と風車小屋」』訳者

演出家・劇作家・俳優であるオリヴィエ・ピイの戯曲には、劇作をする「詩人」の登場することがある。

ピイにとって、戯曲は「詩」だからである。実際、『少女と悪魔と風車小屋』の歌の部分は韻文で書かれているし、今年アヴィニョンで初演されたグリム童話シリーズの第四作『愛と勝利』(原作は『マレー姫』)はセリフの全てが韻文で、オペレッタ形式で上演されていた。戯曲が詩だというのはなにもピイの発明ではない。フランスの演劇のテキストはもとより「詩」であり、ラシーヌやコルネイユなどの古典悲劇にはアレキサン dran という12音節の韻律が用いられている。

この詩型は6音+6音で区切られるが、12音節を5音+7音で区切ると、ちょうど日本の伝統的な詩型になるのは、偶然の一致ではないかもしれない。



右:オリヴィエ・ピイ演出「グリム童話「少女と悪魔と風車小屋」」
撮影 Christophe RAYNAUD DE LAËE Festival d'Avignon

七五調という唱歌舞伎の名文句が浮かぶが、和歌も俳句も標語に至るまで5音と7音の組み合わせでできていて、これらの音節は日本人には耳馴染みがいい。翻訳するにあたっては、ピイの「詩」の魅力と雰囲気伝えるための工夫として、できるだけ全てのセリフが5音か7音で構成されるように、こころがけた。

王子のひとめぼれ 俳優 永井健二

幼少期、ひとめぼれしたレゴの世界。レゴはいつも僕のそばにあった。でも成長と共にレゴとはいったん疎遠に。そして10年ほど前に転機が訪れる。「モジュラービルディングシリーズ」との出会い(再会?)だ。2,000ピースを超える本格的シリーズに、僕は2度目のひとめぼれ。以後、レゴ愛は不変だ。

レゴが見せる無限の世界は、演劇にも似て、不思議と飽きない。「いつかレゴで建てた家に住みたい」とバカバカしくも思っていたが、「いよいよレゴ好きの子の元ハニフィグ(レゴの人物)として生まれ変わる」のも悪くないとちょっと本気で思っている。



制作部としても活動する王子(通称)。デスクにもレゴ愛がある水かえる…。

幕間

こどもの本とおもちゃの専門店「百町森」代表 柿田友広 おもちゃデザイナー

「昔話はストーリーに力がある」というのが私の実感だ。就中、グリムの昔話は。というのは、私は園や小中学校にお話をしに行くのだが、そして、そこでは絵本も読むしわらわった遊びもするのだが、どの年齢の子も昔話は食いつくように聴いてくれる。それは、昔話が伝承文学という中にジャンル分けされ、余計な物が削ぎ落とされているということに関係があるのだから。

中でもグリムは「おおかみと七ひきのこやぎ」のようにちよびり怖い話、「かえるの王さま」のような何かおどろおどろしい話、「ブレーメンのおんがくたい」のような愉快な話… など、ストーリー

グリム童話のみりよく

リーとして面白いだけでなく、どこか上っ面ではない、生きることの奥深い所とつながっている気がする。さて、そんな理由からだろうか、一世紀位前から、画家は自分の力量を試すかのように、昔話を題材に絵本を描いてきた。グリムを題材にした絵本も数多くあり傑作が多いのはその理由からかもしれないと思う。



かきたともひろ 1979年より静岡市葵区鷹匠にて「百町森」を始める。本やおもちゃ、子育ての言葉遊び、著作も多い。

編集後記

小さい頃に読んでもらったグリム童話。大人になって読み返すと、それらは人々の願いが口伝で結晶化したものだと思ふ。その結晶のきらめきに子どもは、そして大人も心ときめかせるのだと思う。(制作部 坂本彩子)

すばる新聞 第12号

一面見出し装飾 深沢襟
一面情報欄デザイン 阿部太一 (DESIGN TEAM)
以下制作部
写真 中尾栄治 組版 丹治陽
編集 (演目担当) 高林利衣、久我晴子
宮川絵理
(広報班) 坂本彩子、内田悠子
計見葵、西村藍
(手書き版) 永井健二 編集部

その時代

一八世紀が終わろうとする頃、フランス革命があった。人権宣言を公布し、国王を処刑し、共和政を実現したこの革命に、当のフランス人だけではなく、ヨーロッパの人々が驚き、とても新しく新しいことが起こったと感じたはずだ。カントは、パリで起きている流血の惨事より、革命を共感の眼で外から見ているヨーロッパの人民の胸中に引き起こされた熱狂の方が重要だ、と語っている。カントがこう言ったのは、フランスに比べて田舎くさいドイツでは、そんな革命は起こりそうもなかったからでもある。

1800年代 ドイツ

しかしふしぎだ。その遅れたドイツでは、同じ頃、前衛的な精神革命が起きていた。ほかならぬカントから始まりヘーゲルに至る「ドイツ観念論」の登場。これはまちがいに哲学史のクワイマックスである。どうして政治的な後進地域でラディカルな精神革命が起きたのか。フランス革命の思想的な意味は、フランス人によってではなく、ドイツの哲学者によってつかみとられている。